

## 海外便り

井村君江  
(明星大学教授)

5月7日 「サヴォイ・シアター」で Simon Callow 独演の *The Importance of Being Oscar* を観た。1881年にドイリー・カートが建てた劇場は、惜しいことに1991年に漏電がもとで炎上し、2年後の1993年に改装オープンしたが、アールデコ風のデザインを残している。以前の豪華な雰囲気はまったく失せてしまっていた。ワイルドが見たら *Patience* (Gilbert & Sullivan 作) に値しないとでも言うであろうか。俳優 Simon Callow は、バーミンガム・レパトリー劇場から始め、いまはオールド・ヴィックやリリックの舞台でも有名であるが、今年の1月に毎週、テレビでディケンズが旅をしながら、自分の作品を朗読したように、『デヴィッド・カパーフィールド』や『リトル・ドーリット』を、ディケンズの扮装で朗読した演技はじつに魅力的で、毎週金曜日の夜が楽しみであった。

このワイルドの一人芝居は、1960年に Micheal MacLiammóir が最初に演じたものである。ワイルドの詩、散文、書簡、戯曲などのサワリを巧みになえ混ぜ、彼の世界を作りあげたもので、9年後にニューヨークやシドニーで演じ評判になった。この MacLiammóir のワイルド一人芝居を、クイーンズ・カレッジの学生だった Callow は、ベルファーストのマックモーディ劇場で実際に見たのである。この舞台に感激して俳優になる決意をし、この時にした MacLiammóir への貴重なインタビューが、今回のプログラムに掲載されている。MacLiammóir のデヴューは、ダブリンでの『ハムレット』であったが、一人舞台上に転じ、スウィフトやエイツなどアイルランド作家の作品朗読をやっていたが、1973年の最後の舞台まで、じつに10年『オスカーになることが肝心』にしばって、演じ続けたのである。

“I fell head over heels in love with Oscar Wilde when I was 13 years old.” というだけあって Simon Callow の一人芝居は、第一部の「幸福の王子とグリーン・カーネーション」からドリアン、ブラックネル夫人、ロバート・ロスへの手紙まで、第二部の『獄中記』からジイドやダグラスとの会話、そして「ダルザス・ホテルに幕が下りる」まで、まるで Wilde が語っているかのような錯覚を覚える演技であった。“As long as people would listen, Oscar talked: talked, talked, talked: talked for his supper …… In the end of course, he talked himself into goal” ワイルドになった Callow

が語り続けた独演は、じつに堪能できた2時間であった。

5月9日 ヘイマーケットを歩いていて、「シアター・ロイヤル」に大きく優雅なロング・ドレスに黒のレースの扇をかかげたウィンダムミア夫人の看板が目に入り、思わず切符を買ってしまった。結構満席で運が良かったのかもしれない。近頃いつもそうであるが、すでに幕が上がっている場合には、いわゆるヴィクトリア調貴族の部屋を思わせるカーテンやクッションの多い舞台装置が、あらかじめ雰囲気を作るように出来ていた。ロイヤル・エクステンジ・シアター・カンパニーで、監督は Braham Murray。ウィンダムミア夫人の Rebecca Johnson は清楚であるが、熱演になると声がヒステリックに響く。アーリン夫人の Gabrielle Drake の演技がよく、この劇は彼女が主役であることを改めて思う。小道具の扇の形が大きすぎるのが気になった。“Irresistibly glamorous performance” と広告にあったが、どうしたわけか Callow の一人芝居で受けた感激はなかった。プログラムも型通りで、前には Merlin Holland の *Wilde. A Lord of Language* などがある。 “We Irish are too poetical to be poets” という言葉などに感激したり、ワイルドと D'Oyly Carte や Savoy の裏話などの記事を、面白く読んだのであった。

5月10日 『ザ・タイムズ』ウイークエンドの一頁半分にワイルドとダグラスの写真、その半分そして裏に亘って Peter Ackroyd の *The Killing of Oscar* という記事が載っていた。今月の19日が、ワイルドがレディングから解放されて百年目にあたる。たしかにワイルドは「現代思潮における文学のバイオニア」であったが、書かなくなった出獄後のワイルドの価値はなく、‘Saint Oscar’ と祭り上げるのはおかしいと厳しく警告している。だが最後にひいているワイルドの言葉は意味深である。“Art is the only serious thing in the world. And the artist is the only person who is never serious”。

もう一つ手元にある『ザ・タイムズ』ホーム・ニュース (1997. 4. 29) は、ワイルドのレディング監獄解放の百周年記念に、Maggi Hambling が作った大理石の彫像を、ポートルートギャラリーに飾り、そのあとアデレード通りに飾られることになったというものである。その像は棺桶の形をした腰掛けで、その一方の端からワイルドが半身をのり出して、右手にタバコを持ち話しをしている姿である。ワイルドの特色である Talking, laughing and smoking のポーズが、ユーモラスに作られている。普通の銅像ではなくグロテスク・ユーモアの腰掛け像である。ワイルドは気に入るようでもあるし、スノップが掛けることを拒む椅子かもしれない。

5月19日 百年前の今日、ワイルドはレディング監獄から解放され自由になった。大理石の棺桶型胸像の序幕式が、ポートルート・ギャラリーで行われていたようだが、出席者はマーリン・ホランドやワイルド・ソサィティの主な者たちで、他の会員はハッチェット出版社で行われたワイン・パーティの方へ行った。入り口で主催者のひとりアンディと話

---

していると、見たことのある紳士が帰りの挨拶に見えた。舞台俳優の Donald Shinden であった。日本の舞台でも演じ、歌舞伎に魅せられその演技の型を取り入れたりしていた。そのシェリダンの『醜聞学校』を観て楽屋に訪ねたとき、可愛い子犬をつれていたことを言うと良く覚えていてくれたが、7年も前のことである。ちょうど俳優の Mark Jarvis がやって来たので記念撮影ができた。Jarvis の *Ballad of Reading Goal* 全詩の朗読は25分かかったが、素晴らしい熱演であった。新しいワイルド研究の本が5冊ほど出て並んでいた。ケストナーでの食事に誘われたが、午前にはビーター・オトワール主演の *Fairy-tale, A True Story* の監督たちに会い疲れていたもので、グリーン・カーネーションを手に、早めに家路に付いたが、しかし来客があり、再びワイン・グラスを手にワイルドと妖精の映画の話で夜が更けた。明日はパーミンガム大学で、6月の27日から29日まで行われる第一回のワイルド・コンフェランスの申込みをせねばならない。

---